

ハルシナイから上流へ⑦

前回は、アメリカ人で開拓使御雇外人の地質学士兼鉱山師長のライマン (Benjamin Smith Lyman) のカムイコタンの記事を紹介した。ライマンは、明治七年に、石狩川水源から十勝国へ山越えした最初の人物であった。

明治九年になって、開拓使のナンバ一ツの高官である開拓使大判官の松本十郎が、石狩川水源から山越えして十勝国に出て、音更川から屈足経由で十勝川を下り、大津に到着する。ライマンに続く二番目の快挙であった。

松本十郎は、カムイコタンから丸木舟で旭川に入り、チカフニ(近文)で、ライマンに対する無念の思いを、次のように記している。「開拓使被レ置タル後官吏幾百千人、誰レ一人北海道ノ水源ヲ研究ノ徒ナキモノ八年、然ルニ一昨年海外萬里米利堅赤髭一人其源ヲ探討セラル、ハ遺憾ノ至リナリ。」

松本十郎は、元庄内藩士で、文久三年(二八六三年)に、庄内藩が与えられた

蝦夷地の浜益、留萌、苫前、天塩の各場所の警備・開発に、父に従い勤務し、地のアイヌの人たちの生活に接した経験を持つ。戊辰戦争では庄内藩は新政府軍と戦い敗れる。この敗北で藩主は

謹慎を命ぜられ、その恩赦に奔走中に、黒田清隆に人物を認められ、開拓使入りし、明治二年に開拓判官に抜擢されて根室詰となる。根室では、殖産興業を

図り、日本人もアイヌも身分・出身問わずに公平に扱い、松本自身も、アイヌの住民から貰ったという「アツシ」(註・厚司)アットウシ atus オヒョウニレの繊維で織った布で作った着物)と呼ばれる衣装を大切に身に着けていた。そのためアイヌの人たちからも「アツシ判官」と称されて敬意を払われていたという。



ように、アイヌの人たちが作ってくれた蔭の葉の仮小屋に泊まり踏査を続けた。札幌を六月八日に出発、カムイコタンには、六月十五日に到着する。

明治六年には、岩村道俊の後を継いで、大判官になり、北海道開拓行政の事実上の最高責任者たる地位に立ち敏腕をふるった。しかし、明治八年に締結された樺太・千島交換条約に基づき、樺太のアイヌの人たちを札幌近傍に移住させようとする黒田長官と、それに反対する松本十郎とが対立するに至った。松本十郎の石狩十勝両河踏査はこのような時期に行われた。

松本十郎はこの踏査の記録として、『石狩十勝両河記行』を遺している。「記行」は、「紀行」が正しいが、引用した『日本庶民生活史料集成 第四巻』では、松本の原本を使用とのこと、

今回はカムイコタンに到着する場面だけ掲載し、詳細は次回に紹介する。文中①は、神居古潭トンネルの深川側に出た所の神居古潭大橋から下流の石狩川の激流で、当連載の④で紹介したカムイウツカ(Kamuy-utka 神・瀬)を丸木舟で溯る時の様子である。竿を差しても上れずに、岸から綱で曳いて上ったのである。

また、②は、これも当連載の④で紹介した、チヨウザメのシャメカムイ伝説で、丸木舟の舷を叩き、シャメカムイに挨拶し、航行の安全を祈る儀式であった。踏査による貴重な記録である。



「蔭の葉の仮小屋」

これによった。また、アイヌ語地名や人名などは、(○○○)と表記されているが、本稿では、(○)と表記した。

松本十郎は、高官でありながら、案内のアイヌの人たちの負担にならないように、天幕(テント)も持参せず、上絵の

(前略)①水愈怒吼々、竿指登ルコト不レ能ルハ往々綱ヲ以テ引揚ル。②《ハラモキ》註・ハラモイ para-moy 広い・湾)ニ至レバ、アイヌ共、舷ヲ叩クコト頻リナリ。何ニ故ヘト問ヘバ、此ノ深淵ニ潜龍沙魚(註・チヨウザメ)大ナル住居ト古来相伝ノ説ト。或ハ大亀ト。(後略)「以下次号」

※毎月第1週号に掲載します (アイヌ語地名研究会幹事)

断章 旭川のアイヌ語地名研究

82 高橋 基